

Title	初唐の「序」について
Author(s)	道坂, 昭廣
Citation	中國文學報 (1997), 54: 1-35
Issue Date	1997-04
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177797
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

初唐の「序」について

道 坂 昭 廣

三重大學

小論で考えようとする種類の序は、これまで適切に定義された名稱がないように思われる。

中國の散文を分類するうえでよく利用されるものに、清の姚鼐が編集した『古文辭類纂』がある^①。しかしその分類は中唐以降の文學狀況に即して行われたもので、それをすべて初唐の文學に當てはめることができるかどうかは検討を要する。姚鼐はこの書において散文を十三のジャンルに分けた。そのなかの「贈序類」と「序跋類」のふたつが序に相當する。

「序跋類」は、「詩書には皆序あり。而して儀禮は篇後に記有り。皆儒者の爲る所にして、其餘の諸子は、或いは自ら其の意を序し、或いは弟子これを作る。……余、古文辭を撰次するに、史傳を載せず。……惟だ太史公・歐陽

初唐の「序」について（道坂）

永叔の表志の序論 數首を載す。序の最も工なる者なり。
……^②」と言い、このジャンルが一編の著作の前後にあつて、その著述意圖を述べたり、内容を要約した文章であるとする。また言葉通り司馬遷「十二諸侯年表序」を採録作品群の最初に置き、このジャンルが古くより確立していたという説明に對應させている。^③

一方「贈序類」については次のようにいう。

老子曰、君子贈人以言。顏淵子路之相違、則以言贈處。梁王觴諸侯於范臺、魯君擇言而進。所以致敬愛陳忠告之誼也。唐初贈人、始以序名、作者亦衆。至於昌黎、乃得古人之意、其文冠絕前後作者。……

老子曰く、君子人に贈るに言を以てすと。顏淵・子路の相違は、則ち言を以て相贈るの處なり。梁王は諸侯を范臺に觴し、魯君は言を擇びて進む。敬愛を致し忠告を陳ぶる所以の誼なり。唐初人に贈るに、始めて序を以て名とし、作る者も亦た衆し。昌黎に至りて、乃ち古人の意を得、其の文 前後の作者に冠絶す。……別れの場合や宴會の席において相手の爲になる言葉を贈る

ことが、このジャンルの源であるという。しかし姚鼐は、このジャンルの確立者として中唐の韓愈を考えており、實際、彼がこのジャンルに採録した作品群は韓愈のものから始まっている。確かに韓愈の送別の序は有名な「送孟東野序」をはじめ、ほとんどが自身の考えを展開しつつ旅立つ相手を勵ますといった内容であり、「所以致敬愛陳忠告之誼」を示した一種の議論の文章である。そして、中唐以降の送別の序は概ねこの形式を襲っている。

ただ私が注目したいのは「唐初贈人、始以序名、作者亦衆」という姚鼐の指摘である。彼は唐の初期に多くの人々が序という名稱の文章を作ようになったという。しかしその現象の意味や、あるいは具體的な作者作品については言及していない。小論はこの姚鼐の指摘を手がかりに、唐に入って急増したとされる新しいタイプの序の實體とその意味について考えようとする。

そのまえにまず、姚鼐のこの指摘の實否を確認し、あわせて考察の対象となる「序」というジャンルについて、今少し明確にしておきたい。

一

唐代の作品をジャンルごとに分類したものとして最初に指を屈するべきは、『文苑英華』であろう。^⑤この書から、唐に入ると「序跋」ではない序が増えてくるという、姚鼐の指摘について考えてみよう。

『文苑英華』には序が一ジャンルとして立てられており、さらに文集(卷六九九～卷七〇七)・遊宴(卷七〇八～卷七一一)・詩集(卷七一二～卷七二四)・贈別(卷七二五～卷七二七)・餞送(卷七二八～卷七三三)・雜序(卷七三三～卷七三五)・卷七三八)というように下位分類が行われている。但し『文苑英華』の分類は少々煩瑣であり、また作品の配屬についても、どうもその題名に従って機械的に行われたように思われる。^⑥このように全く問題がないわけではないが、『文苑英華』の分類と姚鼐の分類はある程度つきあわせて比較することが可能である。

姚鼐の言う「序跋類」は、概ね現在我々が普通にイメージする序や跋を中心にしていてと考えてよく、『文苑英華』

が分類している「文集」「詩集」はここに含まれる。『文苑英華』がこの類の先頭に南北朝末期の作品（宇文道「庾信集序」・徐陵「玉臺新詠序」）をおいたことも、「序跋類」が古くよりあったとする姚鼐の考えと軌を一にしている。さらに兩書がともに採録している作品をくらべ合わせれば、「詩序」の一部も「序跋類」に含まれる。^⑦次に「贈序類」であるが、姚鼐がこの類において採った韓愈の作品のほとんどすべてが『文苑英華』では「餞送」「贈別」に入っており、姚鼐の「唐初贈人、始序以名、作者亦衆」という發言は、直接にはこの二類の、特に初唐の作品群のことを指して言っていると考えられる。作者と作品の數をみれば、彼の指摘は首肯される。では、姚鼐の二つの類に重ならない『文苑英華』の序、即ち「遊宴」「雜序」それに「詩序」の幾つかの作品は、どのような性格をもった序なのだろうか。「雜序」はその分類の原則を見いだすことは容易ではない。だが「遊宴」は如何であろうか。

實は姚鼐は「序跋類」「贈序類」の外に、序と題された作品を「雜記類」というジャンルに配屬させている。具體

初唐の「序」について（道坂）

的には韓愈の「鄆州溪堂詩竝序」や柳宗元の「陪永州崔使君遊讌南池序」などの作品である。それらの作品のうち『文苑英華』は韓愈の作品を採らないが、柳宗元の作品を「遊宴」の部で採っている。「雜記類」に載る序について、林抒は『春覺齋論文』で姚鼐の説を敷衍して次のように解説している。「姚鼐がいういわゆる全く碑の文體を用いるというのは、祠廟廳壁亭臺の類で、事を記してしかも石に刻まないというのは、山水遊記の類である。」さらに「しかしながら災害の勘案・運河の浚渫・塘の築造・祠宇の修築・亭臺の記録は、必ず一類と爲すべきである。書畫を記し、古器物を記す、これもまた別の類とし、山水を記すものまた別に一類とし、……遊讌觴詠の事に至っては、また別に一類と爲すべきだ。」また林抒は、姚鼐が採った柳宗元の作品の外に「雜記類」に含まれるべき作品として、王羲之の「蘭亭序」と李白の「春夜宴桃李宴序」をあげる。^⑧『文苑英華』が「遊宴」と分類した作品は、まさにびつたりとこの定義と重なることになる。さらに林抒は「若^かの遊讌觴詠は、或いは唱和の什有れば、則ち其の首に冠する者は序と

爲し、否なれば則ち専ら其の事を記すも亦た可なり（若遊讌觴詠、或有唱和之什、則冠其首者爲序、否則專記其事亦可）」とも言っており、そうであれば『文苑英華』の「詩序」も含むことが可能になる。ここに言う「遊讌觴詠」の序も「贈序類」と同じく、王羲之「蘭亭序」のような少数の先行する作品はあるものの、唐代前半期に特によく作られた序であることは『文苑英華』の「遊宴」に載る作品群を眺めれば理解されよう。

姚鼐は序を「序跋類」「贈序類」「雜記類」に分けた。^⑩しかし『文苑英華』を検すると、唐代前半期の作品の中には、送別の宴であったことが明らかなのに「遊宴」に分類されている作品もある。^⑪これは一つには先に指摘したように『文苑英華』の機械的な分類によって起こったミスであろう。だが唐代前半期の序には、送別と遊宴をさほど明確に區別して作ろうという意識が無かったように思われ、それがより大きな原因と考えられる。一方また、後述するように『文苑英華』に採録されている作品群を通覧すれば、「遊宴」の序は白居易あたりを最後に衰退していくことがよみ

とれ、中唐時期から以降の文學を分類の基準とした姚鼐が序を三種類ではなく二種類とし、「雜記類」の序を獨立させなかったことは理解できる。但し中唐以降の文學狀況に照らして行われた『古文辭類纂』の分類の必然性が、同時に唐代前半期においても必然となるわけではないことは言うまでもない。

現在、「贈序類」は既にひとつのジャンルとして定着していると言つてよからうが、しかしそれゆえにこそ文學史上に登場し、ジャンルとして確立以前の初期の状態を無視することは正しい態度ではあるまい。姚鼐はこのジャンルの發生を唐の初期と指摘した。では、なぜこの時期にこの種の新しいタイプの序が大量に作られるようになったのか。そしてその現象は文學史においてどのような意味をもっているのか。このような問題が解明されなければ、中唐におけるこの種の序の變容と一ジャンルとして文學史に定着したことの意味も正確に把握することは不可能なのではないだろうか。

初唐の「序」は新しく登場したものの常としてまだ未分

化の状態であり、『文苑英華』や『古文辭類纂』の分類に収まりきらない部分をもっている。そこで姚鼐が指摘した、唐になって急増する「序」とは、宴席（送別もまた宴の一態である）に複数の人々が集い、その場で詩を作り（その作詩は唱和詩のように主従的、或いは往復的な様式ではなかったと思われる）、それら詩群をまとめるに際して付された文章と定義しておきたい。今後小論において、ことわりなく序という場合は、このような文章を指していると考えていただきたい。

二

考察に入る前に、唐以前の序のありさまについて、簡単に述べておきたい。

唐になって急速に増加した序であるが、唐より以前に同種の序が全く無かったわけではない。林紓も指摘した王羲之の「蘭亭序」はその最も有名かつ初期の作品である。蘭亭のみではなく、三月三日の宴における作詩は晉代以降盛んに行われたとされる。^⑩ 現存の資料から見る限り、序もこ

初唐の「序」について（道坂）

の行事と密接に関連していたようである。最初期の作品であり、王羲之がそれに似ていると評され喜んだという石崇「金谷詩序」^⑪は日時を言わないが、一部しか傳わらない程威の「華林園詩序」（題名は嚴可均輯『全晉文』による）は、上巳節の宴が詠われた詩をまとめる際にふざけた文であった。ただ石崇・王羲之らの宴が私的なものであったのに対して、程威の場合は「有詔乃延群臣」の句から、^⑫ 公的な宴であったことがわかる。序がつくられた宴は、このジャンルの出發點において既に公私の違いがあった。その後三月三日の宴で作られた序は、極少數であるが、『文選』に錄される顔延之・王融の「三月三日曲水詩序」など公的な宴における作だけで、^⑬ 蘭亭で行われたような私的な宴での作は、他に現在に傳わるものはない。

もちろん宴において詩が詠われたのは、上巳節ばかりではない。そのようななかで陶淵明「遊斜川詩序」・潘尼「贈二李郎詩序」・嵇含「詩序」（題名はすべて嚴可均輯『全晉文』による）は、私的な宴、しかも潘尼、嵇含の作は送別の宴での詩に付された序であり、初唐の序の先聲と考えること

が可能である。この三首が石崇・王羲之らの作とともに、このような序がおそらくは初めて作られるようになったと思われる晉代に、既に存在することは注目に値する。しかもこののち、このような私的宴の序は作られなくなっているのである。もちろん、私的宴の作品は、それが私的であるがゆえに佚われやすく、現在まで傳わらなかっただけであるという可能性も否定できない。しかし南北朝時代においては上巳節などの節句ばかりでなく、頻繁かつ日常的に宴が行われ、そこに集った人々が席上詩を賦することは極めて一般的な文學習慣であった^⑤。そのような宴における詩は残っているのに、それらと同時に序が作られたということが明確である例は、かほどに少ないというのはどういうことであろう。

たとえば陳の徐伯陽の傳に「太建初め、中記室李爽・記室張正見・左民郎賀徹・學士阮卓・黃門郎蕭詮・三公郎王由禮・處士馬樞・記室祖孫登・比部賀循・長史劉刪等、文會の友と爲り、後蔡凝・劉助・陳暄・孔範も亦た預かる、皆一時の士なり。游宴して詩を賦し、勒成して卷軸とし、

伯陽其の集の序を爲り、盛んに世に傳わる」(『陳書』卷三四文學傳二八)とある。これは『隋書』卷三五經籍志四(集部總集類)に「文會詩 三卷 陳仁威記室徐伯陽撰」とあるのがそれであろうが、これらの記述からみると、序は宴に集った人々の詩群をそのたびごとに纏めて付したのではなく、複數回の宴において作られた詩をひとつに纏める際に作られたと考えられる^⑦。即ち現在では失われた彼の序文は、從來からあった「序跋類」に分類すべき作品だったのである。

「遊讌觴詠」の宴は、文學の場として機能していた。そしてそれらの宴ごとに詩は纏められたであろうが、しかしそのたびに序を付すということは、文學的習慣としては決して確立したものではなかったと考えられるのである。

なぜ唐になって、南北朝時代においては一般的ではなかった序が作られるようになったのだろうか。この問題について、まず序に何が書かれているのかという、文學作品としてこの時期の序がもつ特色と、宴席の性格と序との關係という二點にわけ、前後の時代の文學的状況を参考にしつつ考えてみたい。

唐代における序の隆盛という現象に關して、王勃は量的にも無視しえない大きな位置を占めている。また彼を筆頭とする四傑の生涯は、その後の唐代の文學者達の先蹤であつたともいえる。彼等はみな官僚としては下位に呻吟し、鬱勃とした不平を胸に生涯を送つた。特に王勃は各地を旅し、その土地々々の宴席で序を作っている。その意味で序は彼の生涯を反映しているものである。そして何が書かれていたかという問題についても、その方向を決定付ける役割を果たしたように思われる。そこでまず彼の「贈別」と「遊宴」の序を見てみよう。

下官以窮途萬里、動脂轄以長驅、王公以傾餞百壺、別芳筵而促興。是以青陽半序、明月中宵、離亭擁花草之芳、別館積琴歌之思。去留歡盡、動息悲來。惜投分之幾何、恨知音之忽間。他鄉握手、自傷關塞之春、異縣分襟、意切悽惶之路。既而星河漸落、煙霧仍開。高林靜而霜鳥飛、長路曉而征驂動。含情不拜、空佇聽於南昌、揮涕無言、請投文於西候。因採一字、四韻成篇。下官窮途萬里なるを以て、動に轄に脂さして以て長驅

初唐の「序」について（道坂）

し、王公餞の百壺を傾くるを以て、芳筵に別れんとし、と興を促す。是を以て青陽は半ば序し、明月の中宵に、離亭は花草の芳を擁し、別館は琴歌の思を積む。去留ともに歡を盡くし、動息ともに悲しみ來る。投分の幾何なるを惜しみ、知音の忽ち間たるを恨む。他郷の握手、自ら關塞の春を傷み、異縣の分襟、意は悽惶の路に切なり。既にして星河漸く落ち、煙霧仍お開く。高林靜かにして霜鳥飛び、長路曉けて征驂動く。情を含んで拜さず、空しく南昌に佇聽し、涕を揮い言う無く、請うらくは文を西候に投ぜよ。因りて一字を探り、四韻にて篇を成さん。

「春夜桑泉別王少府序」卷九^⑨

下官狂走不調、東西南北之人也。流離歲月、羈旅山川。輟仙駕於殊鄉、遇良朋於異縣。面勝地、陟危樓。放曠懷抱、驅馳耳目。韓原輿壞、昔時開戰鬪之場、秦塞雄都、今日列山河之郡。池臺左右、覺風雲之助人、林麓周迴、觀巖泉之入興。則有驚花亂下、戲鳥平飛。荷葉滋而曉霧繁、竹院靜而炎氣息。賞歡文酒、思挽雲霄。

人賦一言、庶旌六韻云爾。

下官 狂走不調、東西南北の人なり。歲月に流離し、山川に羈旅す。仙駕を殊郷に輟め、良朋に異縣に遇う。勝地に面し、危樓に陟る。懷抱を放曠し、耳目を驅馳せしむ。韓原の奥壤、昔時戰鬪の場を開き、秦塞の雄都、今日山河の郡を列ぬ。池臺の左右、風雲の人を助くを覚え、林麓の周迴、巖泉の興に入るを觀る。則ち驚花の亂れ下り、戲鳥の平に飛ぶ有り。荷葉滋りて曉霧繁く、竹院靜かにして炎氣息む。賞は文酒を歡び、思ひは雲霄を挽く。人ごとに一言を賦し、庶わくは六韻に旌わさんといふ。

「夏日登韓城門樓寓望序」卷六

一讀して感じられることは、この二首が韓愈ら中唐以降の序と、文體とともに雰圍氣も大いに異にしているということである。同じ送別の宴における序でも、王勃の「春夜桑泉別王少府序」は、主賓である王某がなぜ、どこへ行くのかは全く言及しない。また旅立つ王への勵ましや慰めといった言葉もない。宴のありさまと、その場に流れる主客

の思いを整った駢文で流麗に表現し、ひたすらに別れの悲しみを述べる。

これは、ひとつには王勃の序が彼自身の不遇の思いを基調としてもっているからではないだろうか。「夏日登韓城門樓寓望序」により明らかに見えるように、王勃は自分の不遇の訴えに耳を傾け、その不遇に理解を示してくれる人間や、自分と同様に不遇である人物との出會いや別れの悲喜を序において述べている。これは彼ばかりではない。盧照鄰が「宴梓州南亭詩序」(卷六)の末尾で「百年の歡再びならず、千里の會何ぞ常ならん。下客悽惶として、暫く歸轡を停め、高人の賞玩、豈に斯文を輟らんや(百年之歡不再、千里之會何常。下客悽惶、暫停歸轡、高人賞玩、豈輟斯文)」と現する別れの悲しみや、駱賓王が「夫れ天下の通交、奎蹄を忘るる者蓋し寡し。人間の行樂、烟霞を共にする者幾何ぞ(夫天下通交、忘奎蹄者蓋寡。人間行樂、共烟霞者幾何)」と「晦日楚國寺宴序」(卷九)の冒頭で詠っている友人とであう喜び、これらはみな、彼ら自身の不遇を基底にもって表現されたものであり、初期の序の作者達が共通に抱いた思

いなのである。彼ら四傑の序は出会いの喜び、別れの悲しみを述べた、非常に感傷的な文章であったのである。

序というジャンルにおいて、王勃ら四傑に續いて登場してきたのは陳子昂と宋之問である。特に陳子昂は不遇を基調とした序が多く、四傑の序の傾向を引き繼いでいると言える。しかし、陳子昂には彼等と異なった視線から表現された序が幾首がある。王勃・盧照鄰・駱賓王の不遇は、自分の置かれていた状態をさしていた。少なくとも彼等が不遇の對象としていた人物には、常に自分が含まれていた。

一方陳子昂は自分ではなく、宴の主賓に視線を合わせているものがある。たとえば陳子昂の代表的な作品でもある「送吉州杜司戸審言序」(卷七)である。この序は題名の如く、杜審言が吉州(江西省)の司戸參軍に左遷された際の、送別宴での作品である。

この序において、陳子昂は王勃のように自身の感情を正面から強く述べない。むしろ宴の主賓であり、送られる人物である杜審言に對する言及に終始する。

嗟夫德則有鄰、才不必貴。昔有耕于巖石、而名動京師、

初唐の「序」について(道坂)

詞感帝王。乃位卑武騎、夫豈不遭昌運哉。蓋時命不齊、奇偶有數。當用賢之世、賈誼竄於長沙、居好文之朝、崔駰放於遼海。況大聖提象、群臣守規。

嗟夫、德は則ち隣有り、才は必ずしも貴からず。昔巖石に耕せしもの有り、而かも名は京師を動かし、詞は帝王を感じしむ。乃ち位は武騎に卑しきも、夫れ豈に昌運に遭わざらんや。蓋し時命の齊しからず、奇偶數有らん。賢を用いるの世に當たりて、賈誼は長沙に竄たれ、好文の朝に居りて、崔駰は遼海に放たる。況んや大聖の象を提し、群臣の規を守るをや。

冒頭、才能のあるものが必ず榮達するわけではないと、それぞれの時代の人間の運不運についていう。王勃らもたびたび同じような言及を行っているが、彼らの場合、そこから導かれるのは自分自身であったが、ここでは次に續くのは杜審言の不遇である。優れた才能を持ちながら、下位に呻吟し、さらには不羈の性格によって遂に朝廷を追われることになったという。

杜司戸炳靈翰林、研幾策府。有重名於天下、而獨秀於

朝端。徐陳應劉、不得劇其壘、何王沈謝、適足靡其旗。而載筆下寮、三十餘載、秉不羈之操、物莫同塵、合絕唱之音、人皆寡和。群公愛禰衡之俊、留在京師、天子以桓譚之非、謫居外郡。蒼龍閣茂、扁舟入吳。告別千秋之亭、迴棹五湖之曲。朝廷相送、駐旌蓋於城隅、之子孤游、森風帆於天際。白雲自出、蒼梧漸遠。帝臺半隱、坐隔丹霄、巴山一望、魂斷淥水。於是邀白日、藉青蘋。追瀟湘之游、寄洞庭之樂。吳歛楚舞、右琴左壺、將以緩燕客之心、慰越人之思。杜君乃挾琴起舞、抗首高歌、哀皓首而未遇、恐青春之蹉蛇。且欲攜幽蘭、結芳桂。飲石泉以節味、詠商山以卒歲。返耕餌術、吾將老焉。群公嘉之、賦詩以贈、凡四十五人、具題爵里。杜司戶是靈を翰林に炳らかにし、幾を策府に研く。名は天下に重んぜられ、而も朝端に獨秀たる有り。徐陳應劉も、其壘を劇るを得ず、何王沈謝も、適たま其の旗を靡かすに足る。而して筆を下寮に載ること、三十餘載、不羈の操を秉れば、物の塵を同じうする莫く、絶唱の音を合せば、人の皆和するは寡なし。群公は禰

衡の俊を愛して、留めて京師に在らしむも、天子は桓譚の非を以て、外郡に謫居せしむ。蒼龍の閣茂にありしとき、扁舟吳に入らんとす。千秋の亭に告別し、棹を五湖の曲に迴らさん。朝廷相い送り、旌蓋を城隅に駐め、之子の孤游、風帆を天際に森うす。白雲自ら出で、蒼梧漸く遠し。帝臺半ば隠れ、坐は丹霄を隔し、巴山一たび望みて、魂は淥水に斷つ。是において白日を邀え、青蘋を藉く。瀟湘の游を追い、洞庭の樂を寄す。吳歛楚舞、琴を右にし壺を左にす、將さに以て燕客の心を緩うし、越人の思いを慰めんとす。杜君乃ち琴を挾み起ちて舞い、首を抗して高く歌う。皓首にして未だ遇わざるを哀しみ、青春の蹉蛇たるを恐る。且に幽蘭を攜へ、芳桂を結ばんと欲す。石泉を飲みて以て味を節し、商山を詠じて以て歳を卒えん。返りて餌術を耕し、吾れ將さに老いんとす。群公これを嘉し、詩を賦して以て贈る、凡そ四十五人、具に爵里を題す。杜審言の人となりとそれゆえに左遷されるに至ったことを述べたあと、送別の宴が行われている場所の紹介がある。

その描寫は感情移入されることなく、かなり客觀的にその場が紹介されている。ただ駢文の特色である對偶表現を利用し、現在のこの場と杜審言の旅途とが對比的に表現され、そこに送る者の送られる者に對する感情が示されているとはいえるかも知れない。最後に、杜審言自身の宴に於ける態度・感情を述べてこの序を終える。そこには杜の態度に對する同感と稱贊がある。

杜審言という人物が傲慢で、人と相容れない性格であつたらしいことは『新舊唐書』の彼の傳に既に言及がある。^②

しかしこの序で陳子昂が述べるのは、杜審言という有能な人物を三十年も下僚に置いておき、今度は「外郡に謫居」させるといふ朝廷の行爲に對する怒りである。「群公愛禰衡之俊、留在京師、天子以桓譚之非、謫居外郡。」という表現には、群公（我々）と天子（朝廷）との杜審言に對する評價の違いがはっきり示されている。陳子昂の送別の序には、その他にも有能な人物が下位にあることを述べたものがある。

永淳二年四月孟夏、東海齊子、宦于此州。雖黃綬位輕、

初唐の「序」について（道坂）

而青雲器重。故能委邦君而坐嘯、屈刺史而知名。

永淳二年四月孟夏、東海の齊子、此州に宦たり。黃綬にして位は輕しと雖も、而して青雲の器は重し。故に能く邦君に委ねられて坐嘯し、刺史に屈されて名を知らる。

「暉上人房饒齊少府使入京府序」卷七

縣知事である齊某はその才能に比べれば「黃綬位輕」であるが、上司に信賴され高官に名を知られ、彼のおかげでその地が平穩であるという。彼の位と才能の乖離を言っている。

少府叔鳳彩龍章、才高位下。班超遠慕、每言關塞之勲、梁竦長懷、恥爲州縣之職。

少府叔は鳳彩龍章、才高くして位下し。班超は遠く慕いて、毎に關塞の勲を言い、梁竦は長く懷いて、州縣の職と爲るを恥ず。

「饒陳少府從軍序」卷七

有能な人物が、その才に相應しい職についておらず、自身の前途を切り開くために、西域遠征に参加する、その送

別の宴で作られた序である。駱賓王の西域遠征参加はよく知られているが、陳子昂自身も北方への遠征に参加の經歷がある。このようにこの時期、下級官僚たちが現狀を打破しようと遠征に参加することは決して少なくはなかった。

即ち、この序を贈られた陳某の行爲は決して特殊な行爲ではなく、むしろこのような行爲を多くの人物にとらせたのは、陳子昂の表現を使えば、人々の腦裏に常に「才高位下」という不遇の思いがあったからとさえいえるのである。王勃らの序が不遇であることの嘆きをいうものであるとするなら、陳子昂の序は自分をも含めた才能を自負する人物の、それに相應しい評價を受けないことに對する抗議が込められていると言えるのではないだろうか。

さてこのような自分ではなく、送られる相手に焦點を當てた作品は、實は陳子昂に始まるのではなく、四傑のひとり楊炯にもある。「序跋類」に該當する「王勃集序」を除く、楊炯の十首の序のうち、送別の宴の序は三首である。そのうちの二首は送られる人物の不遇をいう。該當部分を舉げておこう。

東川孫尉、文章動俗、符彩射人。官裁下士、宣大夫之三德、運偶上皇、作東南之一尉。庸才擾擾、流俗喧喧、談遠近爲等差、敘中外爲優劣。殊不知三元合朔、九州同軌。

東川の孫尉、文章は俗を動かし、符彩は人を射る。官は下士を裁するは、大夫の三德を宣し、運は上皇に偶し、東南の一尉と作る。庸才は擾擾とし、流俗は喧喧として、遠近を談じて等差と爲し、中外を敘して優劣と爲す。殊に知らず三元朔を合し、九州軌を同じうするを。

「送東海孫尉詩序」卷三

孫某が地方官吏として赴任する際の送別の宴における序である。この人物は優れた才能を持ちながら、下級官吏として地方へ赴任する。そのため一般人はとやかくいうが、それはそういう批判をする人々が間違っているのだと、彼の赴任を辯護する。

このように楊炯と陳子昂が王勃らと異なり他者に焦點を合わすことができた原因のひとつとして、それぞれの立場

の違いが挙げられる。少なくとも楊炯・陳子昂がこれらの序を作ったときは、彼等は朝廷の官吏であった。^②一方、王勃らの序は都での官位を望みつつ地方をさまよっていた際のものかほとんどである。こう考えればこの兩者の視點の違いは、多少なりとも自分の地歩を得たうえで送る側にあるのか、共に異郷に在って自分もまた何處かへ移動してゆくという、送られる者と心情において同じ側に立っているかという違いによるだけなのである。この表現の違いはひとつのものの裏表であり、その感情の源は異ならないのである。

但し、楊炯と陳子昂の送られる者に對する表現は微妙に異なる。楊炯のもう一首の序「送徐錄事詩序」(卷三)では陳子昂の「饒陳少府從軍序」と同じく、梁竦の故事が用いられている。彼等の違いは、梁竦の典據の使い方の相違に端的に現れている。楊炯はまず、徐學士がいかに優れた人物であるかを述べた後、「粵に永淳元年、孟夏四月に在り、始め内率府錄事を以て出でて蒼溪縣主簿に攝す。彼の漆園の莊周に同じく、聊さか賤職に居り、安定の梁竦に異り、

初唐の「序」について(道坂)

人に勞せらるるを殫たまず(粵在於永淳元年、孟夏四月、始以内率府錄事出攝蒼溪縣主簿。同彼漆園之莊周、聊居賤職、異乎安定之梁竦、不殫勞人)」という。徐學士は莊子や梁竦の如き才能と大志を隠して、下位の役人となった。彼のそのような本質を知る我々は、その地位によって眼を曇らされることなどないとして、「送東海孫尉詩序」と同じく、旅立つ者を慰めその赴任を辯護する。陳子昂が有能な者が下位に有ることの不當を訴える爲にこの故事を用いていたのに對して、楊炯は下位に甘んじる(甘んじなければならぬ)者の有能をいう爲に同じ故事を用い、その人物を辯護しているのである。しかし二人はともに、外の世界ともいうべき自分達以外の者に對して辯護し、抗議していることに注意すべきではないだろうか。ここには彼を知る者は自分を筆頭とする我々宴の參加者なのだという思いが表現されているのである。

王勃・盧照鄰・駱賓王と楊炯・陳子昂の間には、以上のような視線の方向に異なる面もある。しかし彼らとともに、「悲しきかな、年華將に晩ふなんととして、志事寥落たり。公

孫弘の甲第、天子未だ知らず、王仲宣の文章、公卿未だ識らず（悲夫、年華將晚、志事寥落。公孫弘之甲第、天子未知、王仲宣之文章、公卿未識）（王勃「守歲序」卷七）といった、自分達が認められないという、社會における自分及び自分達の位置に對する不滿を抱いていた。このような自分たちの位置の認識が、基調低音の如く彼等の序に流れているのである。その思いが自分に向かえば悲哀になり、自分の周囲の人物に向かえば辯護・抗議になるのである。

このような自分達の意識と社會の現實とのズレは、彼等が集った宴の描寫にも反映されている。具體的には、王勃の「夫の名を朝廷に争う者のごときは、則ち冠蓋相い趣き、迹を丘園に遯る者の若きは、則ち林泉に託さる（若夫爭名於朝廷者、則冠蓋相趣、迹遯於丘園者、則林泉見託）」（秋日宴季處士宅序」卷六）という表現に典型を見ることができ、またこのようにはっきり言わない場合も官という社會と、自分たちの宴席は隔絶した所であるという、ある意味で高踏的な意識が特に王勃の前半期の序に多い。官に身を置く人物が宴に参加している、或いは宴の主催者であった場合

でも、「群公は玉律の豐暇を以て、林壑に倅^せいて情を延ばし、錦署の多閑、巖泉を想いて興を結ぶ（群公以玉律豐暇、俅林壑而延情、錦署多閑、想巖泉而結興）」（晚秋遊武擔山寺序」卷七）や「柳明府は銅章の暇景に藉^かり、道を隣郊に訪ぬ、寶明府は錦化の餘閑に□し、驪を妙境に追う（柳明府藉銅章之暇景、訪道隣郊、寶明府□錦化之餘閑、追驪妙境）」（秋晚什加西池宴饒九隴柳明府序」佚文、「邵少と鹿少は休沐を以て春に乘じ、仲長の別館を開く（邵少鹿少以休沐乘春、開仲長之別館）」（與邵鹿官宴序」佚文）というように、少なくとも今この宴の時は、官という立場を離れた時間でありまた空間であるとして描く。それは四傑の序に共通するものであり、また陳子昂も基本的にはそのように宴の場を表現する。ただ陳子昂は例えば「余獨り一隅に坐し、孤り五蠹に憤る。身は江海に在りと雖も、而して心は魏闕に馳す（余獨坐一隅、孤憤五蠹。雖身在江海、而心馳魏闕）」（喜遇冀侍御珪崔司議泰之二使序」卷二）と官に居ないが朝廷を思っているという、一見宴の場と政治の場を對極においた王勃らと對立するかにみえる表現がある。しかし序全體をみると、「凡に隠りて

一笑し、臂を把りて林に入る……山林の幽寂と、鐘鼎の舊游と、語默譚詠、今復た一たび得たり（隱几一笑、把臂入林……山林幽寂、鐘鼎舊游、語默譚詠、今復一得）」というように、現在の立場は官と野と異なっても、結局は我々は同心であり友人であるということを、陳子昂はこの序の主題としていることがわかる。宴の場を官位という社會的身分が外れた、氣のあった人々の結びつきの場であると高揚して語る王勃らと同じく、陳子昂も宴を友情に最高の價值を置く場として表現しているのである。

これら初唐の序に共通する特色は、見方を變えれば、彼ら中下級官僚を形成していた士人層が連帶し始めたことを示すものであったと言うことができる。このうち唐代文學の基調となる友情と連帶は、少なくとも序とともに宴席で詠われた詩によってではなく、まず序において先鋭に詠まれたのである。

さて韓愈・柳宗元をはじめとする中唐以降の序―「贈序類」の作品も、主に地方官僚として赴任する友人の送別のために、その多くが作られている。それらは不本意な赴任

初唐の「序」について（道坂）

に沈む相手に、教訓やその役目の意義を語って不満を解き、その旅を勵ますといった、まさに「所以致敬愛陳忠告之誼」を内容とする議論の文章であった。一方初唐の序は、みえたように出會いの喜びと別れの悲しみをうたう非常に感傷的な文章なのである。それは、韓愈らの序が公的な立場から自分たちの存在の意味を主張したものであり、王勃や陳子昂らの序が公的な存在ならざるを得ない自分たちの、私的な場における自分たちの感情を表白したものであったからではないだろうか。

初唐の序と中唐の序の内容の違いを生んだ理由については、幾つかのことが考えられる。しかしそれらの問題は、序の作られた場の違い、或いは序の作者のその場における位置の違いということに集約されるように思われる。そこで次に、序がつくられた場である宴について考えてみよう。彼らにとって宴とはどのような場であったのだろうか。

三

まず、初唐において、宴と文學の創作がどのように関わ

つていたかを示すいくつかの資料をみてみよう。

太宗在洛陽宮、幸積翠池、宴酣各賦一事。帝賦尙書曰……徵賦西漢曰……

太宗は洛陽の宮に在りて、積翠池に幸し、宴酣にして各おの一事を賦せしむ。帝は尙書を賦して曰く……

〔魏〕徵は西漢を賦して曰く……

『唐詩紀事』卷四「魏徵」

ちなみにこの宴の詩は太宗をはじめ幾人かの作品が残っている。

師道退朝後、必引當時英俊、宴集園池、而文會之盛、當時莫比。雅善篇什、又工草隸、酣賞之際、援筆直書、有如宿構。

〔楊〕師道退朝の後、必ず當時の英俊を引き、園池に宴集す、而して文會の盛、當時比ぶる莫し。雅より篇什を善くし、又た草隸に工みなれば、酣賞の際、筆を援きて直書するも、宿構の如き有り。

『舊唐書』卷六二「楊師道傳一二」

太宗嘗與侍臣學士泛舟於春苑、池中有異鳥隨波容與、

太宗擊賞數四、詔座者爲詠、召立本令寫焉。

太宗嘗て侍臣學士と舟を春苑に泛ぶ、池中異鳥有りて波に隨ひて容與す、太宗擊賞すること數四、座の者に詔して詠を爲さしめ、〔閻〕立本を召して寫さしむ。

『舊唐書』卷七七「閻立本傳二七」

帝及后數臨幸、置酒賦詩、群臣屬和。

帝〔中宗〕及び后數しば〔長寧公主宅に〕臨幸し、酒を置き詩を賦し、群臣に屬和せしむ。

『唐詩紀事』卷一「中宗」

以上は、四傑や陳子昂らが参加したような宴ではなく、皇帝をはじめとする貴顯の宴である。宴席において必ず詩を賦ことが行われていたことがわかる。もちろん宴席における作詩は、何も初唐のみに特有の活動ではない。むしろ文學の發生と宴は非常に密接な關係にあると考えられる。またそのような原初的形態にまで溯らずとも、宴の參加者達がそこでそれぞれに詩を作るといふのは、曹操・曹丕を中心とするグループからは明らかに始まっている。^②しかし先の資料に併せて『全唐詩』を検すれば、この時期宴席に

において賦された詩は、概ねある制約のもとに作られていたことがわかる。それは宴席の場で、何か題を指定して即興で詩を賦させる詠物詩や、使用する韻を割り當てて詩を作る賦韻詩といった、いわゆる「賦得詩」であった。四傑らの宴について具體的な記述はあまり發見できないが、「人探一字、四韻成篇」のような、作詩に制約が與えられたことを示す記録が序に書かれていたり、貴顯の宴の詩と同様「宴梓州南亭得池字」詩（盧照鄰卷三）や「送魏兵曹使嶺州得登字」詩（陳子昂 卷二）といった詩題があり、「賦得詩」を中心とする詩作が行われていたことがわかる。彼らもまた賦韻詩を主とする制約のある詩をその場で作っていたのである。

これら宴席で作られた詩は、即興の技巧を競う一種のゲームのようなものであったが、このような文學的習慣は南朝の齊・梁の頃に既に確立していた。^②さらに初唐における宴席の詩の大部分を占める、その場で韻を與えられて詩を賦す形式も、有名な話であるが、曹景宗の逸話から考えれば梁の頃に成立したと思われる。次の陳になると、例えば

初唐の「序」について（道坂）

陳の後主（陳叔寶）の詩に「立春日汎舟玄圃各賦一字六韻成篇（座有張式・陸瓊・顧野王・謝仲・褚玠・王綏・傅縡・陸瑜・姚察等九人上）」や「上巳宴麗暉殿各賦一字十韻詩」といったように、詩題に韻を分けたことを明示してあるものが見られるようになる。^③

この陳の後主の詩題を見れば、初唐の宴において作られた詩の多くが、非常に似た制約のものに作られていたことがわかる。このことは、初唐の文學が六朝文學の形式を襲ったものであったことと、形式は價值・評價と結びついているのが常である以上、宴席を支配していた文學的雰囲気も南朝文學の評價・價值であったということを明らかにしている。宴席における「賦得詩」は、初唐の文學が六朝の文學的價值觀を踏襲していたことを具體的な形で示しているのである。^④もっとも宴||文學の場ということ自體が、南朝文學の形式を引き繼いだものであったことはいまさう言うまでもなからう。宴という場は、そこでの創作の形態、ひいてはそこを支配していた文學觀も全く南朝のそれを踏襲したものである。なぜ四傑や陳子昂らは南朝の文學

形態を模倣した宴席で、南朝の文學的價值に従った作詩を行いなから、南朝にはなかつた序を作つたのだらうか。

序が詩の爲の、まさに「端書き」であるなら、陳の後主の詩題は既に充分にその役割をはたしている。先の詩を例にとれば「立春日（何時）汎舟玄圃（何處）各賦一字六韻成篇（どのような制約があつたか）座有張式・陸瓊・顧野王・謝伸・褚玠・王綏・傅縡・陸瑜・姚察等九人上（誰と）」詩を作つたかが記されている。ただこの記録の重點は「各賦一字六韻」という、どのような制約の下に詩を作つたかを書き留めることにあると思われる。なぜなら先にも述べたように、六朝においてはこのような宴が日常的に行われていたからである。少なくとも宴は極めて一般的な文學活動の場として機能していたのである。つまり、宴における作詩も日常のことなら、陳の後主の狎客の例を擧げるまでもなく、宴の参加者もまたいつものメンバー^④なのである。ゆえにあるひとつの宴を特別視する必要などなかつたのである。あくまでもある日の宴において、どのような韻が與えられ、それを用いていかに巧みに詩を賦したか、このことこそが

記録されねばならないのである。その意味で陳の後主の詩題は、當初より現在見る形であつたかどうかには問題はあるにせよ、必要にして充分な詩の「端書き」としての機能をもっている。

このことと對比させて考えてみると、初唐の序は、なぜこの宴が行われ、作者を含む人々がここに集つたのかや、宴がどのような場所でのどのような雰囲気をもつて行われたかといったような、宴そのものを記録することに重點があつたように感じられる。それは、例えば王勃が友人と出會つたことを喜び、その別れを悲しむ「相い與に千里を隔て、九關に阻まる。後會は期す可からず、倚伏安んぞ能く測らん（相與隔千里、阻九關。後會不可期、倚伏安能測）」（「秋日送沈大慶三入洛詩序」佚文）というような描寫から讀みとれるように、彼らが出會いは一回性のものであり、再會は不可能であると認識していたことによる。宴に對してこのような感情を抱いていたことを、よりはっきりと讀みとれる陳子昂の作品を擧げよう。

日月交分、春秋代謝。昔歲居單闕、適言別於茲都、今

龍集昭陽、復相逢於此地。山川未改、容貌俱非。敘名宦而猶嗟、問鄉關而不樂。雲天遂解、琴酒還開。新交與舊識俱歡、林壑共烟霞對賞。江亭迴瞰、羅新樹於階基、山樹遙臨、列群峰於戶牖。爾其丹藤綠篠、俯映長筵、翠渚洪瀾、交流合座。神融興洽、望真情高。覺清溪之仙洞不遙、見蒼海之神山乍出。既而行舟有限、嗟此會之難留、別日無期、歎分岐之易遠。徘徊北渚、惆悵南津。江陵之道路方賒、巴徼之雲山漸異。嗟乎、離言可贈、所願保於千金、別曲何謠、各請陳于五字。

日月交ごも分れ、春秋代謝す。昔歲は單閑に居り、適たま茲の都に言別し、今龍は昭陽に集い、復た此の地に相い逢う。山川未だ改まらざるに、容貌俱に非なり。名宦に敘せらるるも猶お嗟き、鄉關を問いて樂まず。雲天遂に解け、琴酒還た開く。新交と舊識と俱に歡び、林壑と烟霞と共に對賞す。江亭に迴瞰すれば、新樹を階基に羅ね、山樹に遙に臨めば、群峰を戸牖に列ぬ。爾れ其の丹藤綠篠、俯して長筵に映じ、翠渚の洪瀾、交ごも合座に流る。神は融け興は洽く、望は眞

初唐の「序」について（道坂）

に情は高し。清溪の仙洞に遙かならざるを覺え、蒼海の神山たちま乍ち出ずるを見る。既にして行舟限り有り、此の會の留め難きを嗟く、別日期無く、分岐の遠ざかり易きを歎く。北渚に徘徊し、南津に惆悵す。江陵の道路方に賒く、巴徼の雲山漸く異る。嗟乎、離言贈る可し、願う所は千金に保たれ、別曲何を謠わん、各おの請うらくは五字に陳べよ。

「忠州江亭喜重遇吳參軍

牛司倉序」卷七

陳子昂が都にあつたときの友人である吳某・牛某と、恐らくは彼らが江陵方面の任地に赴く旅の途中で再會した喜びと別れの悲しみを述べる。共に異境の地で出會い、彼らばかりではなく、「新交與舊識」と言うように、また杜審言を送った序にその宴の參加者が四七人であつたと言うのと同様に、多くの人々が參加した宴であつたと考えられる。その宴の場である江亭のまわりの自然をここでは細密に描き、そのことによって宴の楽しさを表現している。しかし「既而」と、宴の時間の推移を示し「行舟有限、嗟此會之

難留、別日無期、歎分岐之易遠。」と、宴の終焉と、そして次に何時會るかわからぬ別れを嘆く。

時間の有限性に對する人間の悲しみは、王羲之がこのジャンルの先蹤とも言うべき「蘭亭序」^⑤において「夫れ人の相い與に一世を俯仰するや、或いはこれを懷抱に取って、一室の内に悟言し、或いは託する所に寄するに因って、形骸の外に放浪す。趣舍萬ずに殊なり、靜躁同じからずとも、其の遇う所に欣び、暫く己に得るに當たつては、快然として自ら足り、老いの將に至らんとするを知らず。其の之く所の既に倦み、情は事に隨いて遷るに及んでは、感慨これに係る。向の欣ぶ所は、俯仰の間に、已に陳跡と爲る、猶おこれを以て懷いを興さざる能わず。況や修短は化に隨い、終に盡に期するをや。古人云えらく、死生も亦た大なりと、豈に痛まざらんや。……固より知る死生を一とするの虚誕爲り、彭殤を齊しとするの妄作爲るを。後の今を視るは、亦た猶お今の昔を視るがごとし。」と表白している。王勃をはじめ、初唐の序が「蘭亭序」の影響を受けていることは間違いない。^⑥陳子昂にも「歡窮まり興洽く、樂しき

は往き悲しきは來る。鸞鶴の存せざるを悵み、鸛鳩の久しく没するを哀しむ。徘徊して永歎し、慷慨して長く懷う。東方明かにして畢昴升起、北閣曙けて天雲靜なり。悲しきかな向きの得る所、已に何も無く失われ、今の遊ぶ所、有物に羈^{つな}がるを傷む(歡窮興洽、樂往悲來。悵鸞鶴之不存、哀鸛鳩之久没。徘徊永歎、慷慨長懷。東方明而畢昴升、北閣曙而天雲靜。悲夫向之所得、已失於無何、今之所遊、傷羈於有物)」「薛大夫山亭宴序」卷七)と、「蘭亭序」を意識した表現があるが、彼らが言う悲しみは、宴の時間が流れ宴そのものが終わってしまふことに對する悲しみなのである。更に「安くんぞ意を放ち歡を留め、老いを遣れ死を忘れざるを得んや(安得不放意留歡、遣老忘死)」という表現も或いは王羲之の影響があるかも知れないが、それに續いて「金壺漏は晚く、銀燭花は微なり。北林の烟月光無く、南浦の星河曙に向かう(金壺漏晚、銀燭花微。北林之烟月無光、南浦之星河向曙)」「冬夜宴臨邛李錄事宅序」卷七)というのは、宴の終わりに人々の離散を言っているのである。このように「蘭亭序」の影響の有無に拘わらず、送別の宴での序を中心にほとんどの作品

において「既にして歡樂極まり、良辰征く。白日を攀じて
迴らさず、浮雲を唱いて告別す。山光は黯黯として、綠
樹の將に嚙くはんとするを凝らし、嵐氣は沈沈として、蒼雲
を結びて遂に晩る。同交未だ阻まず、風月は留む可しと雖
も、岐路方に乖き、關山恨みを成す（既而歡樂極、良辰征。
攀白日而不迴、唱浮雲而告別。山光黯黯、凝綠樹之將嚙、嵐氣沈沈、
結蒼雲而遂晚。雖同交未阻、風月可留、岐路方乖、關山成恨）」
〔暉上人房錢齊少府使入京府序〕卷七」と、時間の経過による
宴の終了、そして別れなければならぬ悲しみが述べられて
いるのである。

陳子昂の序に見られるような詠嘆は、王羲之のそれより
もはるかに直接的で形而下的なものである。即ち王羲之の
それが、人間一般が普遍的にもつ存在の不安定さに對する
認識を源としたが、初唐の序は、宴の一回性、今現在の時
間の有限に對する思いから生まれたものなのである。即ち
彼等は「蘭亭序」の最も重要なモチーフを變化させて用い
ているのである。これは南朝で行われた宴とは異なり、初
唐の四傑や陳子昂の參加した宴が、一回限りのもので日常

初唐の「序」について（道坂）

的に行われるといった性格のものではなかったからなので
ある。それゆえに詩そのものより前に、詩が作られた宴を
記録しなければならなかったのである。詠物詩が登場して
から陳の後主まで六朝文學は、その詩を作るに際して與え
られる制約をより厳しく、即時性を要求する方向に進んで
きた。初唐の詩も六朝文學の進んできた流れに乗って「賦
得詩」が作られたのであった。つまり詩は六朝からの流れ
を引き繼いでいるのである。しかし、序は詩と同じ流れに
乗って生まれてきたものではない。むしろその流れを斷ち
切って別の意識から生まれてきたものなのである。

初唐の文學が、六朝文學から文學の方法とともに、文學
の場もまた受け繼いでいたことは確認しておかねばならな
い。しかし人々が一所に集うという點に、六朝と異なる宴
の新しい意味が生まれたのである。

四傑や陳子昂が參加した宴にはどのような人物がいたの
だろうか。序に名前が擧げられている人物たちをみると、
王勃は道王・畢公（秋晚入洛於畢公宅別道王宴序）卷八）や都
督閻公（秋日登洪府滕王閣餞別序）卷八、陳子昂では東平王

〔金門饒東平序〕卷七・戈陽公〔梁王池亭宴序〕卷七・薛大夫〔薛大夫山亭宴序〕卷七〕といったように、まれに王族・貴族や高官の参加者もいたようであるが、大部分は明府（縣知事）を最高とする中下級官僚たちである（盧照鄰・駱賓王の場合、序から読みとれる宴の参加者はすべてこのクラスである）。彼らの宴に参加した人々は、六朝の宴において集った人々と階層が異なるのである。少なくとも王勃や陳子昂らが参加した宴における中心的存在は、貴族から士人、しかも朝廷の高官ではない士人に移動していることは明らかである。考えてみれば、蘭亭の宴に連なった人々もまた、いわゆる山陰の名士たちであり、この宴の後逢うことが困難であったというような人々ではなかった。^④

士人は、六朝貴族のような安定した生活をもたない。^⑤ 自負を胸に低い官位に甘んじて東奔西走する、意にそぐわぬ官僚生活が現實の姿であった。しかしそのような生活であるがゆえに逆に、集まるという行爲に過去の六朝貴族にはなかった新しい感動が生まれたのである。即ち集まるということの新鮮さ、その場での出會いの感動である。六朝に

おいて彼ら士人は文學の主役でもなかったし、ましてや彼らの文學の場をもつことなどなかった。唐に入って、一轉して彼らは任地を轉々とする不遇な官僚生活を主な原因として、集まる機會を持つようになった。しかし貴族層と異なり蓄積した文學の方法を持たず、自身の文學を主張するだけの力もなかった彼らは、同時代を支配していた六朝貴族の文會をまねるしかなかった。だが、そのような舊來の文學の方法、「賦得詩」では、このような彼らの宴の場の感情を表現し傳えることはできなかった。そこで生まれてきたのが序ではなかったであろうか。そのような意味で、序は決して詩群の爲の「端書き」の位置にとどまるものではない。むしろ詩群より重要な、或いは少なくともそれとは異なる獨自の意義をもった、一つのジャンルであったと言つてよいと思われる。さらに序の内容と序が作られた宴、宴に集った人々を考えるならば、序こそが唐になって文學の場に登場し、やがては文學の擔い手になってゆく士人が、自分たちの表現手段として獲得した最初のジャンルであったと考えてもよいのではないだろうか。

今までみてきたように、初唐の序は新興士人の手によって文學史に登場してきた。繰返し述べるが、中唐の序も士人から士人に贈られたものである。しかし中唐の序は大部分が作者と贈られる者との間に特定の個人と個人の個別的な結びつきをみるのが可能であり、序はそのような兩者の關係を基礎に作られている。だが初唐の序は、作者と贈られる者に強い結びつきがある場合でも、その關係の表白とともに集團の感情が詠われなければならなかった。初唐の序の作者は序を書くという役割が與えられた宴の一參加者に過ぎなかったからである。このことが兩時期の作品に異なった雰圍氣を與えているのである。

新しい文學の胎動を示す一方で、個人の獨自の感情を十分に表現しきれないという點は、新興の序とその創作の場である宴が持っていた過渡的な狀態を如實に示すものである。その意味からこの時期の序は、初唐という時期の文學と社會の狀況を極めて強く反映したものであったと言えるであろう。

このような作者の立場や宴の雰圍氣をはっきりと示すの

初唐の「序」について（道坂）

は、六朝文學の傳統をより正統的に受け繼いだ宮廷とその周邊の宴において作られた序である。この階層の宴においても唐のかなり早い時期に序が作られるようになっていく。貴顯の宴に参加し序を作った代表的な文學者として、四傑や陳子昂と同じ階層の出身でありながら全く異なった生き方をした宋之間を挙げることができる。彼は則天武后・中宗の治世の間、權力者の宴に侍り、幾首かの序を現在に残している。

一人御曆、乾坤盡覆載之功、四海爲家、朝野得歡娛之契。若迺侯門向衛、近對城隅、帝子垂休、時過戚里。銀鑪絳節、辭北禁而渡河橋、駿馬香車、出東城而臨甲第。林園洞啓、亭壑幽深。落霞歸而疊嶂明、飛泉灑而迴潭響。靈槎仙石、徘徊有造化之姿、苔閣茅軒、髣髴入神仙之境。芳醪既溢、妙曲新調。林園過衛尉之家、歌舞入平陽之館。是日也、涼陰稍下、溽暑將闌。前階晚而白露生、後池夕而秋風起。重茲行樂、欣陪駟馬之遊、繼以望舒、下頓六龍之轡。爰命賡札、咸令賦詩。記清夜之良遊、歌太平之樂事。各探一字、先成受賞云

爾。

一人曆を御し、乾坤覆載の功を盡す、四海家と爲し、朝野歡娛の契を得たり。若^も適侯門術に向かえば、近古城隅に對し、帝子休を垂るれば、時に戚里を過ぐ。銀鑪と絳節は、北禁を辭して河橋を渡り、駿馬と香車は、東城を出でて甲第に臨む。林園洞啓し、亭壑幽深なり。落霞歸りて疊嶂明かに、飛泉灑ぎて廻潭響く。靈槎仙石、徘徊すれば造化の姿有り、苔閣茅軒、髣髴として神仙の境に入る。芳醪既に溢れ、妙曲新たに調さる。林園衛尉の家を過ぎ、歌舞平陽の館に入る。是の日や、涼陰稍く下り、溽暑將に聞けんとす。前階晚に白露生じ、後池夕に秋風起る。茲の行樂を重ね、欣んで駟馬の遊に陪し、繼ぐに望舒を以てし、下りて六龍の轡を頓む。爰に賤札を命じ、咸な詩を賦せしむ。清夜の良遊を記し、太平の樂事を歌わん。各おの一字を探り、先に成るもの賞を受くとかいふ。

「奉陪武駟馬宴唐鄉山亭序」卷七〇九

宋之問の序は、行われた場所や詩の創作はもちろん、參

加者もまた六朝時代の再現とも言いうる宴において作られたものであった。そのような宴でありながら序が作られたことは、唐に於ける序制作の流行と廣がりともみること可能である。宋之問の皇帝とその周邊の貴顯によって開かれた宴の序、また楊炯の「登祕書省閣詩序」（卷三）のような、朝廷の官僚達の宴の序、さらに王勃の序のなかに少數みられる地方の官僚が官僚としての立場で主催した宴において作られた作品などは、これまで見てきた序と内容が大きく異なる。これまで見てきた序は自分達のその場の感情が反映され、非常に敘情的であったのに對し、これらの序は感情はさほど述べられることがなく、宴のめでたさやすばらしさをひたすら表現した敘事的な文章である。それは、前者が私的な宴であったのに對し、後者が公的なあるいは公的要素をもった宴であったという、宴のもつ性格の違いにあると思われる。つまり一方が宴を社會的身分を否定或いは無視された場とし、序にその考えを反映させたのに對し、これらの序は宋之問の序の題名の「奉陪」という言葉が象徴するように、社會的身分によるそれぞれの位置關係が序

に大きな影を落としているのである。

王羲之の「蘭亭序」は宴に連なった人々の階層は異なるが、王勃らの宴の先蹤とみなすことができる。その理由は、それが私的な宴であったという共通性があるからである。

一方、同じ上巳節の宴でも『文選』に載る顔延之と王融の二首の序は、皇帝の命令で行われたまさしく公式な宴における作品であった。全く六朝時代の宴の再現のような初唐の公的な宴において作られた序は、理屈から言えば『文選』の二首の序に似ていることになる。しかし顔延之や王融の作を代表とする六朝の公的な宴での序は、宴そのものより、宴もまたその一要素としながら王朝や皇帝の治世を頌えることに重點がある。その宴で作られた詩群に付された文であるがゆえに「序」と稱されるが、極論すれば必ずしも序でなくとも表現可能な内容なのである。それにひきかえ宋之間の序を例とすれば、「奉陪武駙馬宴唐鄉山亭序」の最初の對句に「一人御曆、乾坤盡覆載之功、四海爲家、朝野得歡娛之契」と治世を言祝ぐ表現はあるものの、それ以降は宴に向かう道筋の様子や宴の場のすばらしさ、宴の豪華

初唐の「序」について（道坂）

さ、さらには宴の終わりの名残惜しさと、宴のすべてを事細かに描いている。そのように描寫することにより、この宴を他の宴と異なるものとして特異化させているのである。このことは大きくは皇帝の治世をことほぐことになるかもしれないが、それ以上に宴そのものの記録として印象されることになる。ひとつひとつの宴を特化しそれを記録することは、王勃らの序にみられた宴の一回性の悲哀とは異なるが、個別の宴を忘れがたい記憶として印象づけようとする意圖によると考えられる。その點では宋之間の序も、王勃らとは別の意味で宴を特別なものとし、それを記念し記録しておこうという意識によって作られたのであったといえるのである。^④

ちなみに、初唐のこの種の宴において作られた序の大部分は『文苑英華』の「遊宴」に採録されている。「遊宴」の部は柳宗元と白居易の各二首（柳宗元の二首のうち一首は「餞送」にも録される）を最後の作品とする。このことは、六朝の宴の場が最終的にこの時期に消滅したことを暗示する。^⑤また逆に公的・私的の區別なく、初唐の多くの作がこの類

に含まれていることは、先ほど述べた序の作者の宴における立場を含め、初唐の宴の雰囲気を示しているとも言えるのである。

初唐において貴顯が主催し恐らくは貴顯が集った六朝時代と同様の宴は、六朝のように日常的に開かれた（ここで言う日常的とは、先に述べたように陳の後主の例の如く、基本的にいつもの場所で、いつものメンバーで、いつものようにその場で作詩に制約を加えるということが行われた宴をさす）。^④そして宋之問はこのような公的な宴の序を最も多く、そして最も典型的といえる作品を作った人物であった。しかし少なくとも現在に傳わる彼の序は、「上巳泛舟昆明池宴宗主簿席序」「春遊宴兵部韋員外韋曲莊序」（卷七〇九）「送尹補闕入京序」（卷七一九）のような、同じ士人たちとの私的宴における作品の方が多い。現在傳わる狀況が當時の狀況と同じであるとは即斷できないが、宋之問の序からは、貴顯の宴とともに、或いはそれ以上に士人たちが送別や節句を機會として私的な宴を開くことが多くなっていたことを示している。それは宴の持つ意味の變化を示すものであり、その變

化は同時に、宴席が文學に對して果たしてきた役割に變化を促すものであったと思われる。^④

見方を變えればこの變化は、六朝的文學價値の初唐における低下を意味するものでもある。但し、それは直ちに宴そのものが衰退したというのではない。むしろ初唐は宴に新しい意味を與え、新たな文學の場として再生させたといえる。初唐の宴は、六朝文學の衰退を暗示するものであるとともに、新しい文學の搖籃の場でもあったのである。序の文學史への登場は、そのことを意味するものでもあったのである。

四

初唐の序は、この時期の文學と社會の狀況を反映して生まれたものであった。

初唐の文學は、端的に言えば六朝以來の文學的傳統を引き繼いだ「賦得詩」に代表されるような遊戲的文學が、六朝以來の文學の場である宴において行われていたのである。もちろん文學において遊戲性は一概に否定されるべきでは

ない。しかし初唐においてそのような詩作が行われた宴の場の雰囲気は、決して遊戯的ではなかったのである。何よりもまず、場を構成した人間が貴族から士人を中心としたものへと代わったのである。彼らは六朝の文學價值を否定するのではなく、それに従った創作を行った。それがこの時期において依然として支配的な價值であつたからである。しかし六朝時代の宴がいわば日常的に開かれたものであつたのと異なり、初唐のこれらの宴は、その終了が直ちにそこに集つた人々が解散し各地に別れて行くことを意味し、その別れは次回を約束できないものであつた。それゆえ宴の場に流れる六朝時代には無かつた激しい感情が、ふさわしい表現を希求し、そして生まれたのが序であつた。序は士人たちの爲の表現手段であつたのであり、それゆえ六朝文學においてはあまり表面に現れてはこなかつた、横の連帶が強く表現されているのである。

初唐になって序が大量に作られるようになった背景には、士人たちが宴を構成するようになったという新しい事態があるのである。しかし一方で六朝時代と同じ階層を主な参

初唐の「序」について（道坂）

加者とする貴顯の宴においても、少數ではあるが序が作られるようになった。またその一パリエーションとして社會的な身分差を明確に反映させた序も幾つか作られている。士人達の宴が自分達の感情に忠實で、身分を無視した友情の支配する場として序に描かれていたのに對して、このような宴の序はより公的雰囲気をもち敘事的である。だが宴そのものを記念しようとしている點で、士人達の私的な宴の序と目的を同じくする。そしてこのように宴そのものが記録する對象となつたことは、初唐の文學環境が宴を日常のこととする六朝と異なりはじめてことを示すものと考えられるのである。

様々な宴席において作られた初唐の序から讀みとれることは、一言でいえば士人階級の臺頭である。彼等は主に中下級の官僚として激しく中國各地を移動しつつ、「新知・舊識」という言葉に象徵されるように連帶を廣げていった。しかしこの時期の序の基底にある不遇感からは、彼等が自分たちの立場の脆弱さを自覺していたことを讀みとることができる。時代はまだ士人の時代ではなかつたのである。

さらに個別的な強い結びつきを基本として作者が直接的に相手に語りかけることが可能であった中唐以降の「贈序類」に較べ、初唐の序がいわば集團の感情を最優先に述べなければならなかったという點は、この時期の文學の過渡的な様相を端的に示すものである。文學もまた、完全には彼等のものではなかったのである。ただ「賦得詩」という貴族の時代であった六朝の文學習慣と方法を否定するのではなく、その習慣に従うなかで自分達の表現媒體として、序という新しいジャンルを發見し成長させたことは、初唐の新しい文學狀況として注目しなければならないと思われる。

おわりに

こののち、士人の社會における位置の上昇と、詩が士人の表現手段となるのと並行して、序はその文學的意味を變化させてゆく。最初に序というジャンルを定義しにくいと述べたのは、唐一代において勃興し成長確立したこのジャンルは、どの時期に焦點を當てるかによってもつ意味を異にするからである。しかしその變容は、常に士人たちのそ

の時々々の立場をストレートに反映しているように私には思われる。

初唐の序は、文學の世界に新しく登場してきたこの階層の爲の新しい表現手段であった。序は、そもその出發點から士人たちの政治・社會への登場と結びついていたのである。姚鼐が「贈序類」という名稱を與えた時期の序は、いわば貴族の退場、士人の地位の確立の時期ともいえると思われるが、その時期の序に對する考察は今後の課題としたい。

小論は唐になって大量に作られるようになった序というジャンルがもつ意味を、初唐という時期に限定して若干の考察を加えた。そのことによって、複雑な様相をもつこの時期の文學狀況の一端を具體的に見ることができたのではないかと考える。

注

- ① 手近な書物の中で、『古文辭類纂』のジャンル分類に基づいているものをいくつか挙げておくと、日本のものでは、小川環樹・西田太一郎『漢文入門』（岩波書店 一九五七年一月初版）前野直彬「文體」について（『春草考』（秋山書

店 平成六年二月) 所收、初出は『唐宋八家文』(尙學圖書一九七六年)。佐藤一郎『中國文章論』(研文出版 一九八五年五月) など。中國では褚斌傑『中國古代文體論概説』(北京大學出版社 一九八四年) などがある。

② 「詩書皆有序、而儀禮篇後有記、皆儒者所爲、其餘諸子、或自序其意、或弟子作之。……余撰次古文辭、不載史傳、……惟載太史公歐陽永叔表志序論數首、序之最工者也。……」

③ このほかにも例えば『文心雕龍』も「論說篇」や「定勢篇」などで序について述べている部分があるが、内容から「序跋類」のことであると考えられる。また任昉の撰とされる『文章緣起』も「序者、所以序作者之意、謂其言次第有序、故曰序也。漢書曰、書之所起遠矣。至孔子纂焉、上斷于堯、下訖于秦、凡百篇而爲之序……」といい、これも姚鼐のいう「序跋類」のみを意識していたことがわかる。唐より以前においては、序とは序跋のみをさしていたと考えてよからう。但し『六朝麗旨』は姚鼐の定義を肯定しつつ、次のようにいう。「昌黎集多有送人序。文蓋取古人臨別、贈言之義。六朝卻無此體、其實未嘗不有也。如梁簡文與蕭臨川書、全是錄別、亦猶送人之序。但其文則名爲書耳。古文辭類纂云……(贈序類の定義を引用)……其言是矣。特未知六朝則名書。姬傳先生其殆未一攷其源乎。」序によって表現される内容は、六朝時代は書のジャンルが擔當していたのであるとしている。適否はさておき、この言及からも少なくとも、六朝時代までは「贈

初唐の「序」について(道坂)

序類」というジャンルを樹てるほど、作品は豊富ではなかったと考えてよからう。

④ 三つの逸話はそれ、それ『孔子家語』『觀周篇』(「孔子」)及去周、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁者送人以言。吾雖不能富貴、而竊仁者之號、請送子以言乎。」「禮記」「檀弓篇下」「子路去魯、謂顏淵曰、何以贈我。曰、吾聞之也。去國則哭于墓而后行、反其國不哭展墓而入。謂子路曰、何以處我。子路曰、吾聞之也。過墓則式、過祀則下。」「戰國策」「魏策二」「梁王魏嬰觴諸侯於范臺。酒酣、請魯君舉觴。魯君與。避席擇言曰、……今主君兼此四者、可無戒與。梁王稱善相屬。」最後の話だけは宴席が舞臺となっているが、他の二話はともに、送別の際にはなむけに贈られた言葉である。但し宴席の話も魯君が語る内容は、他の話と同じく忠告である。

⑤ もちろん『文苑英華』以外にも、『唐文粹』をはじめ、唐代の文學作品を集めた幾つかの書物がある。しかし、そもそも『唐文粹』という書物が、『文苑英華』に對する反發から生まれたのであるから『文苑英華』が後世に與えた影響は大きい。また『唐文粹』の序の分類は「集序」「天地」「修養」「琴」「博奕」「鳥獸」「果實」「著撰」「唱和聯題」「歌詩」「錫宴」「譙集」「餞別」となっている。この項目をみると、作品の作られた目的・場所と作品の内容による分類とから構成され、分類基準に統一性が見いだし難く『古文辭類纂』の分類と比

較検討することはできない。

⑥ これについては以前にも指摘したことがある（王勃の序について『人文論叢』三重大學人文學部文化學科研究紀要一〇一九九三年三月）。王勃「送李十五序」と駱賓王「贈李八騎曹序」は文字に多少の異同があるだけの、同文である。しかし前者は「餞送」に後者は「贈別」に分類されていることが、その具體的な例となろう。

⑦ 『古文辭類纂』「序跋類」が載せる唐代の作品は以下の通り（括弧内は『文苑英華』での所屬）。韓愈「讀儀禮」「讀荀子」（雜文）「韋侍講盛山十二詩序」（詩序）「荊潭唱和詩序」（詩序）「上巳日燕大學聽彈琴詩序」（詩序）「張中丞傳後敘」（紀述）と柳宗元「論語辨二首」「辨列子」「辨文字」「辨鬼谷子」「辨晏子春秋」「辨鶡冠子」「愚溪詩序」（詩序）である。

⑧ 『古文辭類纂』「贈序類」に載る韓愈の作品のうち、「送王秀才含序」が『文苑英華』に未收録、「愛直贈李君房別」が雜文類であるのを除き、他の作品（送董邵南序」「送孟東野序」「送高閑上人序」「送廖道士序」「送竇從事序」「送楊少尹序」「送李愿歸盤谷序」「送區册序」「送鄭尚書序」「送殷員外序」「送幽州李端公序」「送王秀才填序」「贈張童子序」「與浮圖文暢師序」「送石處士序」「送溫處士赴河陽軍序」「贈崔復州序」「送水陸運使韓侍御歸所治序」「送湖南李正字序」「送鄭十爲校理序」「送浮屠令縱西遊序」は皆、「餞送」「贈別」に採録されている。

⑨ 前後の省略した部分も含め、原文は以下の通り。「按姚氏所言、蓋指柳子厚陪永州崔使君遊譙南池序及序飲・序棋也。然右軍之蘭亭、李白之春夜宴桃李園、雖序亦記、實不權輿于柳州。所謂全用碑文體者、則祀廟廳壁亭臺之類。記事而不刻石、則山水遊記之類。然勸災・濬渠・築塘・修祠宇・紀亭臺、當爲一類。記書畫・記古器物、又別爲一類。記山水又別爲一類。記瑣細奇駁之事、不能入正傳者、其名爲書某事、又別爲一類。學記則爲說理之文、不當歸入廳壁。至遊譙觴詠之事、又別爲一類。綜名爲記、而體例實非一。」（『春覺齋論文』「流別論 一四」范先淵校點 人民文學出版社 一九五九年）

⑩ ただし姚鼐以降も、少なくとも序という文體に關して「序跋」「贈序」「雜記」という分類がすぐに確立したとはいえないようである。手近な總集をみると、『駢文類纂』『皇朝駢文類纂』などは、姚鼐の説は参照しているものの、「記」はひとつのジャンルとしてあげるが、序は「序跋」と「贈序」をひとつにまとめている。六朝までの駢文作品の總集である『駢體文鈔』『四六法海』はともに、いわゆる「序跋」の作品のみを採録しており、その意味では姚鼐の説を補強するものである。また、姚鼐に先んじて、この種の序を指摘したものに、明の吳訥『文章辨體序說』がある。この書は呂祖謙の『宋文鑑』の説を引用して「東萊云、凡序文籍、當序作者之意、如贈送燕集等作、又當隨事以序其實也。大抵序事之文、以次第其語、善敘事理爲上。近世應用、惟贈送爲盛。當須取

法昌黎韓子諸作、庶爲有得古人贈言之義、而無枉己徇人之失也」といっている。

- ⑪ 例えば王勃の「仲氏宅宴序」「綿州北亭群公宴序」(ともに卷七)は内容からみると饌別の宴において作られたと考えられるが、『文苑英華』は「遊宴」に分類している。

- ⑫ 釜谷武志「三月三日の詩——兩晉詩の一側面——」(『神戸大學文學部紀要』第二二號一九九五年)を参照。

- ⑬ 『世說新語』『企義篇』『王右軍得人以蘭亭集方金谷詩序、又以己敵石崇、甚有欣色。』

- ⑭ この句は『北堂書鈔』(卷一三二 幕二)では序のなかの一句とされる。しかし遼欽立氏は『北堂書鈔』を引いたうえで、もともととは詩と序の両方があったが、のち脱落が生じたとし、この一句は「乃」を取り去って、本來は詩の一句であったと考えておられる。『先秦漢魏南北朝詩』中華書局 一九八三年)

- ⑮ 他には梁の簡文帝の「三月三日曲水詩序」が傳わるだけである。宋の袁淑の「游新亭曲水詩序」は一部が残っているが、そこからは公私の別は分らない。また西涼の李暉に「上巳曲水讌詩序」なる作品があったことが記録されている。恐らく公的な宴における序と思われるが、もちろん判断はできない。さらに三月三日に関わらないが、公的な宴において詩が詠われ、同時に序が付された例として、潘尼「七月七日玄圃園詩序」(極短いものであり、おそらくは一部分であろう)・

初唐の「序」について(道坂)

盧思道「從駕大慈照寺詩序」がある。

- ⑯ 宴席において詩を作ったという話柄は六朝においては枚舉の暇もないほど多い。とりあえず宴席賦詩の雰囲気をよく傳えている梁・陳の時期のものを挙げておく。「(昭明太子)每游宴祖道、賦詩至十數韻、或作劇韻、皆屬思便成、無所點易」(『南史』卷五三 昭明太子傳四三)「文帝嘗宴群臣賦詩、徐陵言之、帝即日召(陰)鏗預宴、使賦新成安樂宮。鏗援筆便就、帝甚歎賞之」(『南史』卷六四 陰鏗傳五四)。この二例から、本文で述べるように、六朝末期の宴ではその場で韻や題が與えられ、その制約に従って如何に早く詩を作るかが評價の対象になっていたことがわかる。

- ⑰ 魏の文帝に「敍詩」(嚴可均輯『全三國文』による)は、『初學記』(卷十 皇太子三)では單に「魏文帝集曰」としており、序の早い例とするには危険かもしれないし、現在みることができるのはその一部分であろうと思われるが、太子時代、いろいろな場所で開催した宴の席上、人々に自分とともに詩を作らせたという言及があり、恐らくは過去の多くの宴席で作らせた詩を纏める際の文章であったと思われる。この種の行爲は早い時期からあったと考えられる。

- ⑱ 注⑥拙稿参照。

- ⑲ 使用したテキストは『王子安集』(蔣清翔註 上海古籍出版社 一九九五年)、なお王勃の作品で「佚文」と言うのは王國維が日本で發見した「王勃集」から現行本にはない作品を

選んで編集した「王勃集佚文」をさす。この後小論で引用する他の文學者の作品は以下のテキストを用いた。こゝでまとめておく。陳子昂『新校陳子昂集』（臺灣 世界書局）。楊炯『楊炯・盧照鄰集』（徐明霞點校 中華書局 一九八〇年）。盧照鄰『盧照鄰集箋注』（祝尙書箋注 上海古籍出版社 一九九四年）。駱賓王『駱臨海集箋注』（陳熙晉箋注 上海古籍出版社 一九六一年）。宋之問『文苑英華』。

⑳ この履歷は『舊唐書』卷一九〇上 文苑上 杜審言傳一四〇に「累轉洛陽丞。坐事貶授吉州司戶參軍、又與州僚不叶……」（『新唐書』の杜審言傳（文藝傳上）にもほぼ同文がある）と、彼の傳にも記されている。

㉑ 例えば『新唐書』列傳一二六 文藝上 杜審言傳に「擢進士、爲隰城尉、恃才高、以傲世見疾。蘇味道爲天官侍郎、審言集判、出謂人曰、味道必死。人驚問故、答曰、彼見吾判、且羞死。又嘗語人曰、吾文章當得屈、宋作衙官、吾筆當得王羲之北面。其矜誕類此。」（『舊唐書』にも同文がある）。

㉒ 高木正一「駱賓王の傳記と文學」（『立命館文學』二四五 一九六五年一月）参照。

㉓ 『初唐四傑年譜』（張志烈 巴蜀書社 一九九三年）・『楊炯・盧照鄰集』・『陳子昂年譜』（『陳子昂詩注』（彭慶生注釋 四川人民出版社 一九八二年所收）などを参照。それらによれば「送徐錄事詩序」を作った永淳元年、楊炯は太子詹事府司直・崇文館學士であつた。陳子昂は「送吉州杜司審言序」

をつくったとき、右拾遺であつた。

㉔ 『後漢書』梁竦傳「竦生長京師、不樂本土、自負其才、鬱鬱不得意。嘗登高遠望、歎息言曰、大丈夫居世、生當封侯、死當廟食。如其不然、閑居可以養志、詩書足以自娛、州郡之職、徒勞人耳。後辟命交至、竝無所就」

㉕ 王勃の生涯それぞれの時期の序の特色は注⑥拙稿参照。

㉖ このような表現に『世說新語』を出典とする典據が用いられていることが、しばしばある。いうまでもなく『世說新語』は世俗や社會を無視し、私生活の充實を圖った魏晉南朝貴族の逸話を集めた書物である。四傑たちは、貴族生活やその放埒な生活に對するあこがれとしてではなく、世俗的價值より個人的價值を優先させた生き方にあこがれを感じていたように思われる。このことも本文に後述するように、彼等の新しい價值に基づいた『世說新語』の讀み方であつたといえるのではないだろうか。

㉗ この點については森野繁夫『六時詩の研究』（第一學習社 昭和五一年）などに既に考證がある。また注⑦の例も参考とすることができよう。

㉘ 序に見える作詩の制約は、王勃については既に注⑥拙論二三頁でも指摘している。なおこの王勃の序については、注⑨でも述べたが正倉院御物に「王勃詩序殘卷」が殘されており、その價值については王國維や我が國の内藤湖南博士などがつとに言及されている。『正倉院本王勃詩序の研究』（神戸市

外國語大學外國學研究所 一九九五年）は、兩先生の研究から現在に至るまでの研究史を踏まえ、さらにそれぞれの作品に極めて詳細な譯注が付されたものである。ただこの作詩の條件を述べた部分の譯は、例えば「さあ皆さん一言詩を賦して（各賦一言）」（於越州永興縣李明府送蕭三還齊州序）、「一人ごとに一篇の詩を賦し（人賦一言）」（秋日宴山庭序）、「ちょっと皆で作ってみて（一言均賦）」（上巳浮江宴序）となっている。また中國古典文學大系二三『漢・魏・六朝・唐・宋散文選』（平凡社 昭和四五年）に選抜されている王勃のいわゆる「滕王閣詩序」においても「一言均賦」の部分の譯は「少し賦ってみたところ」となっている。中國においてもこの序の同部分に注して「意謂主人發出一句倡議、請大家都作一首四韻詩」となっているものがある（『唐代文選 上』孫望・郁賢皓主編 江蘇古籍出版社 一九九四年一〇月）。しかしこれらの部分はこう讀むべきではないと思う。例えば駱賓王「初秋於寶六郎宅宴得風字」詩の序は「蓋陳六義、請賦一言、卽事凝毫、成者先唱云爾」といい、また陳子昂「春晦日餞陶七於江南同用風字詩」の序も「同賦一言、俱題四韻」となっている。これらの例からわかるように、「一言」は一字・一韻と同じ意味であり、「参加者がみな同じ韻で（一言均賦）」や「それぞれに一つひとつの韻を分けて（人賦一言）」のように解釋するべきであると思われる。

- ②⑨ このような、南朝の詠物詩の習慣についてはス波六郎博士初唐の「序」について（道坂）

「賦得」の意味について」（『中國文學報』第三冊 一九五一年一〇月）・網祐次博士「中國中世文學研究——南齊永明時代を中心として——」（新樹社 一九六〇年）が詳しい。

- ③⑩ 『南史』卷五五 曹景宗傳四五「景宗振旅凱入、帝於華光殿宴飲連旬、令左僕射沈約賦韻。景宗不得韻、意色不平、啓求賦詩。帝曰、卿伎能甚多、人才英拔、何必止在一詩。景宗已醉、求作不已。詔令約賦韻。時韻已盡、唯餘競病二字。景宗便操筆、斯須而成、」

- ③⑪ 陳の後主の詩は逯欽立輯『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局 一九八三年）を使用した。また後主の詩のうち、宴席で複數の人々とともに作られたことが題名から明らかなのは、「獻歲立春光風具美汎舟玄圃各賦六韻詩（座有張式・陸瓊・顧野王・殷謀・陸瑒・岑之敬等六人上）」（括弧内は割註の形で書かれていることを示す。本文も同様）「上巳玄圃宣猷堂禊飲同共八韻詩」など、樂府詩を除く二六首のうち全部で十七首と多數を占める。

- ③⑫ 初唐の文學が六朝のそれを踏襲していたことについては、多くの指摘がある。またその習慣や方法も引き繼いでいたことについても、例えば明の胡應麟が「詠物起自六朝、唐人沿襲、雖風華競爽、而獨造未聞。惟杜諸作自開堂奧。……」（『詩藪』内編卷四）と指摘している。

- ③⑬ ただし分韻・探韻といった具合に分れる賦韻詩は、全く六朝の形式と同様であったというわけでもないように思われる。

洪邁は「南朝人作詩多先賦韻、如梁武帝華光殿宴飲連句、沈約賦韻、曹景宗不得韻、啓求之、乃得競病兩字之類是也。予家有陳後主文集十卷、載王師獻捷、賀樂文思、預席群僚、各賦一字、仍成韻、上得盛・病・柄・令・橫・映・復・并・鏡・慶十字。宴宣猷堂、得注・格・白・赫・易・夕・擲・斥・圻・亞十字。幸舍人省、得日・謐・一・瑟・畢・訖・橋・質・映・實十字。如此者凡數十篇。今人無此格也。」《容齋續筆》卷五「作韻先賦韻」という。彼の言う今人は、無論宋代を指すのであろうが、これを讀むと南朝時代は使用する同韻の字がすべてが指定されていたようであるが、唐では一字をあげるだけで、それと同じ韻の字を自由に使用できたようであり（何句目に挙げられた字を使うことが望ましいというような緩やかな規範はあったようであるが）、基本的な形式は南北朝の習慣を踏襲しているものの、唐において既に變化していたのである。この初唐の賦得詩については、稿を改めて考えてみたい。

㉔ 「(後主) 常使張貴妃・孔貴人等八人夾坐、江總・孔範等十人預宴、號曰狎客。先令八婦人鬟采箋、製五言詩、十客一時繼和、遲則罰酒。君臣酣飲、從夕達旦、以此爲常」《南史》卷一〇 陳本紀下一〇) また、本文一七ページの詩に名前が擧がる九名の多くは他の詩でも出入りはあるものの、よく名が録されていることは注㉔の詩題からも明らかである。基本的に宴の参加者は固定していたのである。

㉕ 「蘭亭序」については、その眞偽をめぐって様々な説がある。しかしここでは、その問題に立ち入らず、少なくとも王勃ら四傑の活動以前より、王羲之の作とされていたことを確認しておく。

㉖ 例えば王勃については注㉔拙稿五・六頁を参照。

㉗ 蘭亭の宴の参加者は、小尾郊一博士が「蘭亭の詩」《中國文學に現れた自然と自然觀——中世文學を中心として——》(岩波書店 一九六二年所収) において既に詳細に考證しておられる。それらの人々は蘭亭の付近に住む、いわゆる山陰の名士たちであった。

㉘ 彼らが貧しかったことは、例えば王勃は「倬彼我系」(卷三)や「送劼赴太學序」(卷八)において、意にそまぬ官仕えをしなければならなかったのは家の窮迫の爲であるという。盧照鄰も晩年に、友人達に自分の醫藥費を求める手紙(與在朝諸賢書)「與洛陽名流朝士乞藥直書」「寄裴舍人諸公遺衣藥直書」ともに卷七)を送っている。また、そのなか家系の没落も述べている。彼らは士人としての使命感とともに、生活の爲官僚として生きていかねばならなかったのである。

㉙ 「新舊唐書」宋之問の傳や殘された詩をみると、彼がその時々の權力者に付しその宴に参加して詩文をもって奉仕していたことが浮き彫りになる。

㉚ 例えば王勃では「夏日仙居觀宴序」(佚文)や楊炯の「崇文館集詩序」(卷三)などは、宴の主催者或いは参加者の身分

を強く意識して書かれている。

④1 ただし宋之問の「早秋上陽宮侍宴序」(巻七〇九)一首だけは『文選』の序と同様、皇帝(則天武后)の治世を褒め稱えることを主とした序である。

④2 姚鼐が、中唐以降の文學に基づいて分類を行ったということは、このことから明らかである。

④3 初唐においても、特に則天武后・中宗の治世期には日常的に宴が行われたことは、例えば『唐詩紀事』巻一「中宗」の項の記事がすべて宴にかかわっていることから明らかである。しかもその内容は六朝の宴と遜色がない。

④4 『文苑英華』の遊宴の項をみれば、このような貴顯が主催した公的な宴における序は、張說・王維といった玄宗皇帝やその側近達の宴席に侍った文學者の作品を最後に減少してゆく。このことは従來の、庇護者の下での創作といった狭い世界からの文學の脱出を示す。宮廷という保守的世界において六朝文學はその後も生き残るが、玄宗皇帝の宮廷の宴が最後の開花のように、今のところ私には思われる。

④5 ここで氣づくのは、『古文辭類纂』が送別の宴における序に限定し、『文苑英華』「遊宴」にあたる序を立項しなかったことは、中唐以降の社會狀況を反映するものでもあったというものである。送別の宴は、言うまでもなく人の移動を示すものである。それに對して遊宴とは、基本的には本來の場があつて一時的にそこを離れて、或いはその場で遊ぶということ

初唐の「序」について(道坂)

とであり、それは逆に言えば人に安定した場があることを意味する。そのような安定は、典型的には貴族あるいは貴族的な生活基盤をもつ者によって達成される。「遊宴」の衰退はそのような基盤の消滅を暗示し、「贈序」の隆盛は、人々が官僚或いは僧侶といった、社會的身分を新たな生活の基盤として、移動を常態とするような生活に入ったことに對應していると言えるのではないだろうか。この推測を補強するのが、我が國の漢文學の狀況である。平安朝漢文學が最初、南朝から初唐の影響を強く受けたことは既に多くの指摘がある。しかも序というジャンルにおいては初唐の影響を強く受けたという。ところが日本の序は中國の如くその後ドラスティックな變化はみられず、むしろ「贈序類」に含まれるであろう送別の序は少なく、この一時代を通じて作られ続けたのは「遊宴」に分類される種類の序が大部分であつたとされる。しかもそれら序の内容は當時の貴顯の生活と結びついたものが多いようである(日本古典文學大系六九『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』小島憲之校注 岩波書店 昭和三十九年六月 所收「懷風藻解説」、及び大曾根章介『王朝文學論攷』岩波書店一九九四年一〇月を参照)。平安時代が貴族の時代であつたことは周知の事實である。序というジャンルの變容と時代狀況の關係を考えるうえで、我が國のこのような序の傾向は大いに參考になると思われる。